8．教育・福祉学部

研究の概況

舟橋　厚

今年度末の3月11日に発生した東日本大震災では大勢の方々が亡くなりました。心からご冥福をお祈りいたします。過酷で辛い状況に日本全体がはまり込んでいる今日このごろだからこそ、「人の心のありかた」を扱う教育福祉学部が「人として生きる価値」や「生きる意味」を多くの人々とともに考え、「生きがいや幸せ」を探す努力（研究）にリーダーシップを発揮する必要があると考えます。

心身の発達に障害のある方々が乳児期から高齢期にわたり、自らの個性を守り、育み、活かして、地域社会で家族や支援者の皆さんとともにADL（日常生活動作）やQOL（生活の質）を高め、生きがい（自己実現）のある人生を地域社会で創造するためには自然科学や人文・社会科学など、多くの学問分野を総動員することが必要です。私たちは科学的な研究姿勢とパーソン・センタード・ケアの両者を「療育科学」としてアウフヘーベン（止揚）することが心身に発達障害のある人々の人生に直接貢献することであり、教育福祉学部の重要な責務であると考えます。そこで、調査法、心理検査法、観察法、面接法などの行動科学的研究手法を駆使し、1）心身の発達に障害のある人の発達・学習支援に関する研究、2）これらの人々が主体的に地域住民と協力し合い、安心して社会参加し、人として尊敬されて生活するための社会的、教育的、心理的および福祉的支援に関する研究、3）コロニー内外において、療育支援者（施設や地域社会の療育担当職員やご家族など）の療育方法や上記の行動科学的研究手法に関する学術的支援、などを行うことを教育・福祉学部の基本研究戦略としました。

今年度は、室長1名（舟橋）、研究員2名（長谷川、竹澤）、リサーチレジデント1名（飯田）の研究活動を兼任部長の鈴木が支援する形で研究を行いました。

各研究室の研究活動

以下に各研究室の本年度の研究概要を述べますので、ご意見、ご要望などをいただけましたら、幸いです。

発達教育研究室：

発達教育研究室では、自閉症スペクトラム障害（ASD）のある子どものための対人・コミュニケーションの発達支援方法に関する研究を行っています。また発達障害のある子どもの家族の支援方法に関する研究として、ASDのある幼児の養育者を対象とした心理教育プログラムの開発に取り組んでいます。コロニー内の活動としては、短期療育型入所支援モデル事業の支援会議に出席し、事業報告書を作成しました。このほか、愛知県立春日台養護学校のサポートネットワーク会議に出席し、あいち発達障害者支援センターと共にペアレントメンター研修事業や発達障害児支援検討保育所事業に携わるなど、コロニー内施設との連携を深めました。

さらに、春日井市が主催する子育て教室に参加するなど、地域支援にも積極的に取り組みました。

共生福祉研究室：

障害のある人および家族が地域で安心して生活するために地域社会に足らないものはなんでしょうか？日常の療育現場で重度知的障害や重度自閉症のある方が起こす“行動”は障害のない一般の方々には“問題行動”と安易に誤認識されることが多いのは残念な現実です。この“問題行動”を「のっぴきならない本人の心の叫び（情動の生起）」と考え、“問題行動”の背景にある心と脳の関係を謎解きすることが大切です。

昨年・一昨年に引き続き、療育の日常エピソードを脳理論からわかり易く論じた記事や「療育相談コーナー」の掲載を「教育と福祉の特別支援ジャーナル」（コレール社）で継続し、ご家族や支援者の方々が障害のあるご本人をよりよく理解し受容できるように支援しました。

快情動場理論の実証のため、ドッグセラピー体験中の自閉症児の笑顔生起頻度の変化と問題行動減少やコミュニケーション行動の促進との関連性について笑顔識別インターフェース（筋電図）を用いた定量的な測定を筑波大学大学院情報工学科人工知能研究室との共同研究として実施しました。また、ドッグセラピー（広くアニマルセラピー）や音楽療法、そして各種心理療法などの効果を説明する理論として提案した快情動場理論を量子力学的な数理によりモデル化する可能性についてさらに検討を加えました。

春日台養護学校ではPTA役員のお母様方のご協力を得て、障害のあるお子さんのコミュニケーション行動が養護学校入進学前後でどのように変化するかを量子力学的な数理解析法で分析する縦断的研究を今年度も遂行しました。

医療資格をもたない者が介護、自立支援、教育等の現場でたんの吸引等の医療的ケアを行うための法制度および研修の在り方が、平成24年度からの実施を目指して厚生労働省で検討されています。これに関連した調査とシンポジウムを行う（独）福祉医療機構の社会福祉振興助成事業（先進的・独創的活動支援事業）に実行委員として参加しました。

文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C）による「知的障害者用認知症スクリーニング尺度の標準化」にも引き続き取り組みました。

障害のある方々の息遣いを感じられる研究をめざして

教育・福祉学部は、心身の発達にどのような障害があ

る方に対しても、研究をする側・される側がお互いに人として尊重し合い、「ぬくもり」を感じながら、思いやりの精神を大切にして研究を推進しています。障害のある方の意志や主体性、本人の生きがい、自己実現などに本当に役に立つ療育科学としての研究を目指しています。

そのためには実験室的研究のみならず、療育の現場で障害のある方々の息遣いを感じながらのフィールド研究も大切です。こうしたアプローチにより普段は見落としがちな微細な特性や現象にも気づくことができると考えます。なぜならば、心身の発達に障害のある人々が現実に生活している姿から、真実を学ぼうとする姿勢はものごとを科学的に追究する科学者として根本的に必要な研究態度だと考えるからです。

教育・福祉学部が本年度中、研究の推進のために連携した諸施設等はコロニー中央病院、コロニー養楽荘、コロニーこばと学園、春日台養護学校、コロニー運用部、県障害福祉課などです。

自閉症スペクトラム障害（ASD）のある幼児の母親の育児ストレスについて

竹澤大史

ASD圏の診断を受けた幼児（CA：56.84 ± 14.82ヵ月、DA：36.05 ± 16.26ヵ月、DQ：61.78 ± 22.18）の母親160名（36.06 ± 4.05歳）に育児ストレスインデックス（PSI）を実施し、その得点と子どもや母親の属性、ソーシャルサポートとの関係について調べた。PSIは子ども側面（C：7）と親の側面（P：8）の計15の下位尺度からなり、得点が高いほど育児ストレスが高いことを示す。

子どもの性別や月齢によるPSI得点の差はみられなかったが、出生順位別では「P2社会的孤立」及び「P4親としての有能さ」において、第1子群の方が第2子群より高い値を示した（それぞれ$p < .01$；$p < .05$）。また診断名別では、「C2子どもの機嫌の悪さ」及び「P8健康状態」において、自閉症群がアスペルガー群よりも高い値を示した。発達指数（DQ）別では、「C1親を喜ばせる反応が少ない」において、DQ高群よりも低群と中群の値が高く（それぞれ、$p < .01$；$p < .05$）、「C3子どもが期待通りにいかない」において、低群の値が中群と高群より高かった（ともに$p < .01$）。母親の年齢別では、「C2子どもの機嫌の悪さ」において、20歳代より40歳代の母親の得点が高かった（$p < .05$）。母親の就労状態別では、「C4子どもの気が散りやすい」及び「P1親役割によって生じる規制」において、就業群より専業主婦群の得点が高かった（それぞれ、$p < .01$；$p < .05$）。ソーシャルサポート得点の平均値（65.90）＋1SD（15.47）を高サポート群、−1SDを低サポート群とし、2群間でPSI得点の比較を行ったところ、「C5人に慣れにくい」、「C6子どもに問題を感じる」、「C7刺激に敏感」、「P8健康状態」を除く全ての下位尺度と総得点において、低サポート群のPSI得点が有意に高い値を示した。

障害のある子どものコニュニケーション行動に対する母親の概念変化に関する研究ー量子力学的数理解析法による検討ー

舟橋　厚

H養護学校の生徒の母親10名を調査対象とした。障害のある子どものコミュニケーション行動に関する「概念」15項目（あらかじめ実験者が選定：1.アイコンタクト、2.こだわりがある、3.落ち着きがない、4.順番を待つ、5.不安、6.いらだつ、7.言葉を話す、8.笑顔、9.ジェスチャー、10.友達、11.嫌がる、12.他者とのコミュニケーション、13.親（他者）との接触、14.自宅、15.学校）を用意し、それぞれの項目を2つずつ、一対比較法で母親にパソコン提示し、それぞれの対になった項目（概念）がどのぐらい関連があるかを「強い関係がある」、「少し関係がある」、「関係は弱い」、「ほぼ無関係」の4つからマウスクリックで1つ選択させた。調査条件は2つ（Pre調査、Post調査）で、Pre調査では養護学校に入進学する半年前の子どもの様子を回想し、Post調査では1年経過した段階での子どもの様子について回答させ、量子力学的数理解析法（クリエイテイブ　ブレインズ社　鈴木一彦特許第3335602号）により解析した。母親群全体の解析では、入・進学前では「アイコンタクト」は「笑顔」、「親との接触」との相関係数がともに0.99と高いが、「他者とのコミュニケーション」との相関は0.65と低かった。ところが、入・進学1年後には「アイコンタクト」と「親との接触」との相関係数が0.88と若干減少し、一方、「他者とのコミュニケーション」との相関係数は0.97と増加した。この結果から入・進学前はアイコンタクトを親との接触時に使い笑顔を生起させていた生徒たちが、学校での生活を経験することで、アイコンタクトを、親との接触よりも、むしろ他者とのコミュニケーション時に多用して笑顔を生起させるように行動を変化させたことが示唆された。

自閉症児のコミュニケーション能力促進におけるドッグセラピーの役割について−笑顔識別インターフェースによる予備的検討−

舟橋　厚、青木　健[1]、Anna Gruebler[2]、門根秀樹[2]、坪内靖憲[2]、鈴木健嗣[2]

自閉症児7名（小4〜中3）に対して、ドッグセラピー

を愛知県コロニー発達障害研究所内で実施し、笑顔識別インターフェース（特許 2010－006094　筑波大学大学院情報工学研究科人工知能研究室）を用いて、笑顔生起頻度などを電気生理学的に測定した。ドッグセラピーは本人と母親とドッグ２頭（ポメラニアン雌）がサークル内（9.6m²）に入り、個別で、安静状態（精神課題）およびドッグセラピーの２条件の測定セッションを設け実施した。ドッグセラピー実施前の測定時は１）風景画像 20 枚を２秒間隔で合計 40 秒間注視中、２）電極装着や安静状態測定をした部屋からドッグセラピーを実施する部屋まで 20 m を徒歩移動中、の笑顔等の生起状況を電気生理学的に測定した。同時にドッグセラピー実施前・中・後の自閉症児の行動と表情を詳細にビデオ録画した。ドッグとのふれあいを避ける児童２名、母親やドッグセラピストの励ましを受けて、ドッグとふれあいを試みる児童５名の２グループに分かれたが、ドッグとのふれあいを行う児童５名にも、行動の積極性に多寡が観察された。ドッグセラピーに参加した自閉症児７名全員に何らかの笑顔が生起したことが、ビデオ録画の解析から明らかとなり、笑顔識別インターフェースによる測定結果も、７名中５名の自閉症児に笑顔が生起したことを裏付けた。ただ、残り２名の自閉症児は電極を装着することを嫌がったため、インターフェースにより笑顔発生を確認することはできなかった。ただ、母親でさえ見落とす自閉症児の笑顔生起を表情識別インターフェースでドッグセラピー中にモニターできることが明らかとなった意義は自閉症児の快感情を研究する上で大きい。

[1]中部アニマルセラピー協会、[2]筑波大・院・システム情報工学

介護職員等による医療的ケアの実施に向けた制度と運用方法のあり方に関する調査：障害福祉関係事業所を対象として

長谷川桜子

経管栄養の注入等の日常生活に必要な医療的行為（医療的ケア）を介護職員等の非医療職が行うための制度が、平成 24 年度からの実施を目指して検討されている。これによって医療的ケアを行う事業所が増え、かつ安全性も確保される方策を探るべく、（独）福祉医療機構助成の「愛知県の重症心身障害児者の医療的ケアを考える」事業の実行委員として、他の委員と協働して調査を実施した。県内の障害福祉関係事業所に 1,804 の調査票を郵送し、事業の主担当者ないし責任者に実態および意向を問う質問への記入を依頼した。ヘルパー事業所等の訪問系事業所から 215、入所施設等の非訪問系事業所から 392 の回答を得た。

非医療職が医療的ケアを行っていない事業所に、非医療職による医療的ケアが制度化された場合の実施意向をたずねたところ、「条件によっては前向きに検討」が最も多かった（訪問系 49.2%，非訪問系 44.1%）。実施を前向きに検討する条件としては、訪問系、非訪問系に共通して、「行政による研修の実施」「免責/賠償保険制度の整備」「主治医からの依頼書/指示書の提示」の順に選択率が高かった。このうち前者２つは、すでに厚生労働省で実現や充実に向けた具体的検討、対応が行われている。したがって、非医療職による医療的ケアの広まりのためには、依頼書/指示書の発行等といった医師の関与がどれだけ得られるかがカギであろうと指摘できた。調査結果からは、この他にも、研修のあり方等に関する示唆を得た。

こころの居場所に関する研究

飯田沙依亜、甲村和三[1]、長谷川桜子、竹澤大史、幡垣加恵[1]、舟橋　厚

近年、学校生活への適応と居場所の関係が注目されている。学校生活において自分の居場所を見つけられない辛さを訴える学生が増えており、不登校等の問題行動との関連が指摘されている。学校生活における居場所はその多くが友人関係の中に認められている。発達障害を抱える学生は、コミュニケーションや社会性の障害をもち、クラスメートとの人間関係に困難を抱える場合が少なくない。その分、居場所のなさを感じ、不適応を示すリスクも高いと考えられる。

そこで本研究では居場所づくりを支援するため、まず居場所を見つけられない辛さについて整理することを目的とし、居場所のなさ尺度の開発を試みた。調査は 12 月に県内の私立大学で実施され、大学生 256 名の回答を得た。居場所のなさ尺度は、居場所のない状態に関する大学生の自由記述や居場所感尺度、不適応感尺度等を参考に作成した。居場所のなさ尺度全 20 項目について因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った結果、居場所のなさを構成する要因として３因子が抽出された。居場所のなさの背景には、その場から逃げ出してしまいたいという逃避願望、周囲に人はいるのにひとりぼっちであると感じる孤独感、周囲の動きや流れにうまく乗れず立ち尽くしてしまう戸惑い感が存在することが示唆された。

[1]愛知工業大

研究業績

著書・総説

竹澤大史：ソーシャル・スキル・トレーニング（SST）．松村暢隆，石川裕之，佐野亮子，小倉正義（編）ワードマップ認知的個性ー違いが活きる学びと支援．新曜社，pp 275-279，2010.

竹澤大史：新興教育運動と障害児教育．清水貞夫，藤本文朗，青木道忠，荒木穂積，黒田　学，津田充幸，向井啓二（編）キーワードブック障害児教育ー特別支援教育時代の基礎知識．クリエイツかもがわ，pp 264-265，2010.

原著論文

慶野裕美，舟橋　厚，美和千尋[1]，竹澤大史，細川昌則，慶野宏臣[2]（[1]名古屋大，[2]障害者乗馬レモンクラブ）：広汎性発達障害児における乗馬療育活動実施による日常生活上の行動変化の検討．発達障害研究 32：181-190，2010.

竹澤大史，幸　順子[1]（[1]名古屋女子大）：K市における発達障害児の母親への育児支援ー参加者のニーズ調査ー．名古屋女子大学紀要（人文・社会編）57：379-386，2011.

飯田沙依亜，甲村和三[1]，舟橋厚，長谷川桜子，竹澤大史，幡垣加恵[1]（[1]愛知工業大）：大学生の居場所に関する研究ー居場所のなさに着目してー．愛知工業大学研究報告 46：49-56，2011.

その他の印刷物

竹澤大史：認知的個性とは何か？ー才能と発達障害に応じる個性化教育ーソーシャル・スキルと認知的個性．日本教育心理学会総会論文集，pp 152-153，2010.

長谷川桜子：在宅の重症心身障害のある成人における主な日中活動の場が自宅である現状を説明する変数ーロジスティック回帰分析による検討ー．日本特殊教育学会大会発表論文集，p 582，2010.

飯田沙依亜，大平英樹[1]，舟橋　厚（[1]名古屋大）：認知課題による不快感情の抑制ー閾下呈示された感情刺激に対する抑制効果の検討ー．日本心理学会大会発表論文集，p 908，2010.

飯田沙依亜：不快感情と上手く付き合うために．コロニーだより364号，p 7，2010.

幸　順子[1]，竹澤大史（[1]名古屋女子大）：春日井市における発達障害児の家族への育児支援1ー「子育て教室」の立ち上げと活動内容ー．日本発達心理学会大会発表論文集，p 415，2011.

竹澤大史，幸　順子[1]（[1]名古屋女子大）：春日井市における発達障害児の家族への育児支援2ーアンケートによるニーズ調査ー．日本発達心理学会大会発表論文集，p 416，2011.

飯田沙依亜，甲村和三[1]，長谷川桜子，竹澤大史，舟橋　厚（[1]愛知工業大）：大学生の居場所感に関する一考察ー大学生の生活適応過程に着目してー．日本発達心理学会大会発表論文集，p 437，2011.

竹澤大史：平成22年度短期療育型入所支援モデル事業報告書．愛知県心身障害者コロニー，2011.

飯田沙依亜，大平英樹[1]，舟橋　厚（[1]名古屋大）：認知課題を用いた不快感情の促進・抑制ー時系列的検討ー．感情心理学研究：18 (3)，p 203，2011.

学会発表

荒木結衣[1]，水上喜美子[1]，長谷川桜子，堅田明義[2]（[1]仁愛大，[2]中部学院大）：高齢者における音楽聴取時の感情についてー心拍反応からの検討ー．日本生理心理学会大会（水戸）2010.5.16.

飯田沙依亜，大平英樹[1]，舟橋　厚（[1]名古屋大）：認知課題を用いた不快感情の促進・抑制ー時系列的検討ー．日本感情心理学会大会（広島）2010.5.29.

竹澤大史：認知的個性とは何か？ー才能と発達障害に応じる個性化教育ー話題提供 ソーシャル・スキルと認知的個性．日本教育心理学会総会（東京）2010.8.29.

Mizukami K[1], Hasegawa S, Terada S[2], Kumagai T[3], Katada A[3]（[1]Jin-an Univ, [2]Kochi Univ, [3]Chubu Gakuin Univ）：Relationships between basic EEG rhythm and other aging indices in extremely older participants. World Congress of Psychophysiology（Budapest）2010.9.2.

Iida S, Ohira H[1], Nakao T[2], Funahashi A（[1]Nagoya Univ, [2]Univ Ottawa）：Automatic emotion regulation by cognitive task. World Congress of Psychophysiology（Budapest）2010.9.2.

長谷川桜子：在宅の重症心身障害のある成人における主な日中活動の場が自宅である現状を説明する変数：ロジスティック回帰分析による検討．日本特殊教育学会大会（長崎）2010.9.19.

飯田沙依亜，大平英樹[1]，舟橋　厚（[1]名古屋大）：認知課題による不快感情の抑制ー閾下呈示された感情刺激に対する抑制効果の検討ー．日本心理学会大会（大阪）2010.9.20.

吉川　徹[1]，加藤　香[2]，竹澤大史，日詰正文[3]（[1]名古屋大，[2]自閉症協会，[3]文部科学省）：愛知県における自閉症スペクトラム障害ペアレントメンター活動の実態．日本児童青年精神医学会総会（前橋）2010.10.28.

飯田沙依亜，大平英樹[1]，木村元洋[2]，木村健太[1]，舟橋　厚（[1]名古屋大，[2]Univ Leipzig）：認知課題遂行による不

快感情の抑制ー事象関連脳電位（ERP）を用いた検討ー．日本基礎心理学会大会（大阪）2010.11.27.

幸　順子[1]，竹澤大史（[1]名古屋女子大）：春日井市における発達障害児の家族への育児支援１ー「子育て教室」の立ち上げと活動内容ー．日本発達心理学会大会（小金井）2011.3.26.

竹澤大史，幸　順子[1]（[1]名古屋女子大）：春日井市における発達障害児の家族への育児支援２ーアンケートによるニーズ調査ー．日本発達心理学会大会（小金井）2011.3.26.

飯田沙依亜，甲村和三[1]，長谷川桜子，竹澤大史，舟橋　厚（[1]愛知工業大）：大学生の居場所感に関する一考察ー大学生の生活適応過程に着目してー．日本発達心理学会大会（小金井）2011.3.26.

講演など

竹澤大史：発達障害のある子どもへの支援ー保育園における支援方法についてー．発達障害児支援検討保育所事業（瀬戸）2010.5.27.

竹澤大史：発達障害のある子どもへの支援ー保育園における支援方法についてー．発達障害児支援検討保育所事業（北名古屋）2010.6.7.

舟橋　厚：療育に活かす脳科学．平成22年度全国重症心身障害児者通園事業施設協議会関東地区研修会（東京）2010.7.10.

舟橋　厚：知的障害を主とした重複障害について．平成22年度愛知県教員研修講演会（愛知郡東郷町）2010.7.22.

竹澤大史：自閉症スペクトラム障害のある児童・生徒への支援についてー理論と方法ー．春日台養護学校教職員研修会（コロニー）2010.8.25.

舟橋　厚：療育に活かす脳科学ー快情動場理論を療育の現場で活用するー．平成22年度東海子ども環境学会研究会（名古屋）2010.9.7.

舟橋　厚：快情動場理論を療育や特別支援教育の現場に活用する．愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所県民講座（名古屋）2011.2.12.

舟橋　厚：快情動場理論を特別支援教育の現場に活かす．日進市教育委員会平成22年度第4回特別支援教育コーディネーター研修会（日進市）2011.3.11.

その他の研究活動

海外活動

長谷川桜子：第15回精神生理学国際会議に出席，研究発表（ハンガリー共和国）　2010.9.1.～4.

飯田沙依亜：第15回精神生理学国際会議に出席，研究発表（ハンガリー共和国）　2010.9.1.～4.

地域活動

舟橋　厚：地域療育支援部門検討会議委員（コロニー）　2010.4.1～2011.3.31.

舟橋　厚：春日台養護学校 学校評価委員会評議員（コロニー）　2010.4.1～2011.3.31.

竹澤大史：春日台養護学校・はるひ台学園サポートネットワーク会議（コロニー）　2010.4.1～2011.3.31.

竹澤大史：短期療育型入所支援事業支援会議（コロニー）　2010.4.～2011.3.

竹澤大史：春日井市子育て教室アドバイザー（春日井）　2010.5.～2011.2.

竹澤大史：発達障害児支援検討保育所事業アドバイザー（コロニー）　2010.5.～2011.3.

長谷川桜子：愛知県の重症心身障害児者の医療的ケアを考えるシンポジウム実行委員会委員（名古屋）　2010.8.8.～2011.3.31.

竹澤大史：ペアレントメンター養成講座講師（コロニー）　2010.10.2.～3.

竹澤大史：はるひ台学園・はるひフォーラムアドバイザー（コロニー）　2010.12.～2011.2.

舟橋　厚：障害児ドッグセラピー実践研究（中部アニマルセラピー協会と筑波大学大学院情報工学研究科人工知能研究室との共同研究）　2010.12.～2011.3.

教育活動

舟橋　厚：動物介在健康医学（中部大学生命健康科学部生命医科学科）　2010.4.12.～2010.9.30.

飯田沙依亜：心理学Ⅰ（大同工業大学）　2010.4.1.～2010.9.30.

飯田沙依亜：こころの科学（愛知工業大学）　2010.4.1.～2011.3.31.

飯田沙依亜：心理学（中部学院大学通信教育）　2010.4.1.～2011.3.31.

飯田沙依亜：心理学実験A・B（中部学院大学通信教育）　2010.4.1.～2011.3.31.

飯田沙依亜：教育心理学（愛知工業大学）　2010.10.1.～2011.3.31.

飯田沙依亜：生徒指導論（愛知工業大学）　2010.10.1.～2011.3.31.